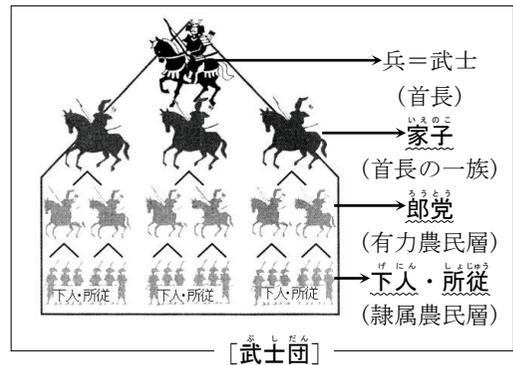


[A] 武士団の成立・発展—テキスト P21 対応—

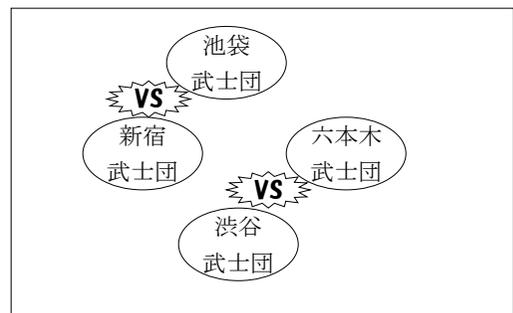
武士という存在が生まれたのは、だいたい 10 世紀頃だ。10 世紀といえば、律令体制に基づく班田収授法が崩壊して、有力農民の田堵に名(名田)の耕作を請け負わせる負名体制へと、土地制度における大転換が行われていた時期。この頃には、貧窮農民による浮浪・逃亡・偽籍が横行していたため、戸籍・計帳は機能を失って、地方政治はボロボロになっていたよね。

そこで、国家は国司に一国内の支配を全面的に委任して、大きな権限と責任を負わせた。つまり、国司の権限が大きく強化されたわけだ。一国内の支配を任せられた国司は、ある程度の課税率を決める権利も認められたので、税金の徴収を強化していく。少なくとも 40~50%の税金をかけることになるんだけど、これは地方豪族や有力農民からしてみれば、たまったものじゃないよね。だから、課税率に不満をもつ地方豪族や有力農民と国司との間で対立が激化して、地方政治は混乱していく。そして、地方豪族や有力農民は自分たちの土地を守るため、さらに拡大するために武装化するようになった。これこそが、戦いを専門とする「兵」と呼ばれる武士の登場なんだ。

「兵=武士」と呼ばれるようになった地方豪族たちは、自分たちの下っ端も武装化させて、「兵の家」という小さな武士団を形成するようになった。具体的には、自分たちの一族を家子、田堵(のちの名主)などの有力農民を武装化させて郎党、下人・所従などの隷属農民層を武装化させて下人・所従(呼び方変わってねえ…)、といった具合にね。こうした「兵(武士)一家子一郎党一下人・所従」で構成された集団のことを武士団というんだ。



ただし、この時期の武士団というのは、あくまでも「小武士団」とか「地方武士団」と呼ばれるもので、大規模なものではない。イメージ的には、それぞれの国の中に、いくつもの武士団が存在しているという状態。東京都の中に、「新宿武士団」、「池袋武士団」、「渋谷武士団」、「六本木武士」とか、たくさんの武士団がいて、お互いに争っているイメージだね。…地方の生徒は東京都を例えにしちまってゴメンよ、別にカップであることを差別しているわけじゃないんだ(バカにしていってば)。



こうした各地で武士団が争う中で、勢力を拡大していったのが、後述する平将門や藤原純友なんだけど、それらを解決・鎮圧しなければならなかったのが国司だ。そこで、国司はこうした一部の武士団をスカウトして、国衙(国司の役所)の組織に組み込もうとしたんだ。例えるならば、先ほどの「渋谷武士団」が暴れまくっていたら、「新宿武士団」をスカウトして国司の支配下に組み込み、お墨付きを与えることで、彼らに「渋谷武士団」を鎮圧させようとしたわけだ。こうした国司の支配下に組み込まれて、反乱の鎮圧や逮捕にあたる武士を押領使・追捕使という(押領使・追捕使は平将門・藤原純友の乱に際して、初めて設置され、その鎮圧にあたった。平将門の乱においては下野押領使に任命された藤原秀郷が鎮圧にあたり、藤原純友の乱においては追捕使に任命された小野好古が鎮圧にあっている)。

11世紀になると、貴族・寺社などの荘園領主の支配下に組み込まれた荘園と、国司の支配下に組み込まれた国衙領(公領)と、荘園公領制が成立していった。ということは、荘園にいる武士たちは貴族・寺社などの荘園領主を主人とし、国衙領(公領)にいる武士たちは国司を主人とするわけだから、それぞれ主人が異なる。そのため、荘園・国衙領(公領)の間で紛争がさらに激化していった。

こうなると、もはや国司レベルではこの紛争を解決することはできない。そこで、こうした紛争解決・沈静化のため中央から軍事貴族と呼ばれる連中が追討使として地方に派遣されるようになったんだ。…って、「軍事貴族」って何やねん？

これは、その名の通り軍事を専門とした貴族で、その苗字は「源」とか「平」とかいう。つまりは源氏・平氏のことなんだけど、たぶん君たちは「ヤベっ、ついに来た！源氏！平氏！…カッコええ！！！」って思うだろう。ただ、ちゃんとハッキリ言っておこう。この当時の源氏・平氏は大したことありません。むしろ、出世する見込みのなかった落ちぶれ貴族というべき。

この頃、都では藤原氏が栄華を築いていて、その他の家柄が入り込む隙間なんてなかった。清和天皇を先祖とする家柄の源氏も、桓武天皇を先祖とする家柄の平氏も、中央政界において出世できる見込みなんてなかった。そこで、彼らは弓矢などの武芸を磨くようになり、軍事貴族と呼ばれるようになったんだ。そんな中、地方では戦が絶えなくて混乱中。そこで、彼ら源氏・平氏がこれらを鎮圧するために地方に派遣されることになったわけだ。

さて、地方で戦いまくっている小武士団(地方武士団)のもとに、都から軍事貴族と呼ばれる奴がやってきた。

軍事貴族「やいやいやい、お前ら。いい加減戦いはやめんか、こらあ！」

地方武士「何やと！てめえ、誰だよ。どこのどいつだ、こらあ？」

軍事貴族「あん？俺か。俺は源(or平)っちゅうもんだけどよ。」

地方武士「源(or平)？聞いたことねえなあ。てめえ、どこ中の源(or平)だよ、こらあ？」

軍事貴族「お前らは知らねえ中学だよ。ただし、俺のご先祖様はすげえんだぞ？…なんとまあ、俺のご先祖様は、あの清和天皇(or 桓武天皇)なんだよ！！！」

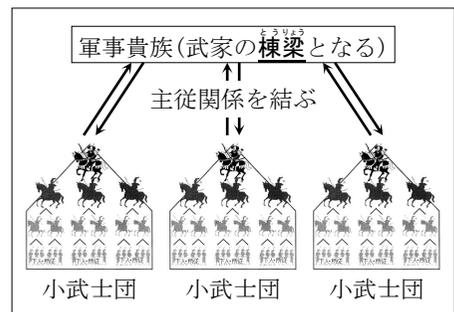
地方武士「…ひ、ひ、ひえええ！！あ、あの清和天皇(or 桓武天皇)のご子孫なんですか！」

軍事貴族「そうだ！あの清和天皇(or 桓武天皇)だぞ。者ども、控えい、控えい！」

地方武士「ははー！」

って感じでな。こうして、地方に派遣された軍事貴族たちは、その地域の小武士団(地方武士団)たちと主従関係を結んで、大きな武士団を形成していったんだ。そして、軍事貴族は都に帰らずに地方に土着して、小武士団(地方武士団)をまとめあげる存在となっていった。こうした武士団をとりまとめるトップのことを武家の棟梁という。代表的な例をあげると、桓武天皇を祖として平高望(高望王)から始まる桓武平氏や、清和天皇を祖として源経基から始まる清和源氏が武家の棟梁になるんだ(源氏には、醍醐天皇を祖とする醍醐源氏や、村上天皇を祖とする村上源氏など様々ある)。

そして、このような地方を制した源氏や平氏が、その後中央政界に進出して行って、平清盛や源頼朝のように天下をとることになるわけだ。



梁

[B] 承平・天慶の乱 ※「解説プリントー撰関政治ー<承平・天慶の乱>」とほぼ同じであるので、すでに学習が済んでいる場合は読み飛ばしても構わない。

[A] 武士団の成立・発展でも説明したように、源氏・平氏の先祖はもともと天皇だった。でも、天皇の子供はたくさん居すぎるので、長男・次男以外は天皇になれない者も多い。そして、終いには皇族からも外されて、天皇家の臣下の籍に降ろされてしまう(これを臣籍降下という)。その代表格であるのが、桓武天皇を祖先にもつ曾孫の高望王だ。「王」という名称がついていることからわかるように、もともとは皇族だったんだけど、朝廷の財政悪化のため、途中で皇族から外されてしまったんだ。そして、天皇の臣下という立場になり、「平」の姓を与えられたので、平高望とも呼ばれている。こうした高望王(平高望)の子孫を、桓武天皇の血を引く平氏ということで桓武平氏という。

その高望王(平高望)の孫で、のちに関東で大暴れすることになるのが平将門。彼は、下総国(現在の千葉県)の猿島を拠点とした豪族だったんだけど、15~16歳の頃に平安京へ出て、時の関白である藤原忠平に仕えるなど、12年ほど在京してから故郷下総に戻るようになった。しかし、久しぶりに帰ってみた地元の所領には、なぜか伯父の平国香が住んでいたんだ。

将門「ただいま～」

国香「おっ、おかえり～」

将門「…え？ちよ、ちょっと、おじさん！ここ僕の家ですよ！」

国香「そうだよ？で、何か？」

将門「いやいやいやいやいや、僕の家は何でおじさんがいるんですか！」

国香「いや～、しばらくお前の顔見なかったから、失踪でもしたんじゃないかねえかな～、と思ってさ。だから、お前の家も所領も俺がもらっておいたんだ。」

将門「はあ！？現に今俺がここに帰ってきているじゃないすか！」

国香「知らねえよ。お前のもんは俺のもんだろ？」

これは国香が悪いよね…。そのため、将門は935年におじの平国香をぶっ殺すことにした。そして、この知らせを受けて急遽都から戻ってきた国香の子平貞盛にも見事勝利して、将門の関東における名声は一躍高まるようになったんだ。なお、この時点では、反乱というレベルにはないことがわかるかな？あくまでも、自分の所領を叔父の国香に奪われたから、それを奪え返したにすぎない。いわば、正当防衛になるわけだ。

さて、こうした将門の名声を慕って、興世王や藤原玄明といった者たちが将門の保護を求めようになっていった。彼らは、略奪などを繰り返して、国司から追われている身の犯罪者であったが、親分肌の強い将門親分は彼らをかくまうことにしたんだ。しかし、そんな将門のもとに常陸の国司がやってくる。



国司「お～い、将門さんよ？あんたのところに藤原玄明って犯罪者がいるだろ？さっさと出せや！」

将門「藤原玄明？そんな奴知りませんな～」

国司「てめえ、お前がかくまってるのは、こちとら知ってるんだよ」

将門「知らねえもんは知らねえって言ってんだろ？ここは俺の土地だぞ？さっさと帰れや！」

国司「くっ…！お前どうなっても知らねえぞ！」



さすがに、これはやばいよ？国司から追及されてしまったら、将門にもその罪が及ぶかもしれない。そのため、興世王と藤原玄明の2人は自首することを申し出たんだ。

二人「将門さん、すんません。俺らのせいで将門さんまで巻き込んでしまって…。俺ら、もう自首しようと思います…。」

将門「な～に、言ってんだお前ら。お前らはもはや俺の仲間だろ。仲間のピンチを俺が見送すわけねえだろ。いずれ、国司が逮捕しにくるかもしれねえ？それなら、国司を先に襲っちゃえばいいってばよ！」

こうして、**939年**、将門は常陸(現在の茨城県)の国府(国司の役所)を襲撃してしまった。しかし、国府を襲撃してしまったことは、朝廷に対して反乱を起こしたということになる。「それならば、いっそのこと関東全域を奪ってしまって、しばらく様子を見てみたらどうか」という興世王の提案を受けて、将門は続けて下野(現在の栃木県)・上野(現在の群馬県)の国府も襲撃して、これを攻略することに成功したんだ。そして、そんな絶好調の将門のもとに一人の巫女がやってきて、こう告げた。

巫女「将門さん、あなたは桓武天皇の血を引いているそうですね。私は菅原道真公のお言葉をそなたに授けましょう。将門よ、そなたこそ京都の朝廷に代わる新しい天皇となるのです！」

こうして、将門は自らを新しい天皇である新皇と称して、京都の朝廷を真似し、関東に新しい御所を設けるなどしていった(ちょっと、調子に乗りすぎ…。何か死亡フラグが立ち始めているよね)。その後、一段落ついたので、家臣たちをいったん自分たちの所領に戻らせたのだが、その隙を見逃さなかったのが、以前将門に父を殺され、自身も敗れていた平貞盛だ。貞盛は、ムカゲ退治の伝説で有名な下野押領使(諸国に設置された犯罪者追捕の職)藤原秀郷と協力して、将門の拠点を襲撃し、討つことに成功したのであった。



□ 平将門の乱『将門記』

……天慶二年十一月廿一日をもて、常陸国に渉る。国は兼ねて警固を備へて、将門を相待つ。……よりに彼此合戦の程に、国の軍三千人、負のごとく討ち取られたり。

時に武蔵権守興世王、竊に将門に議りて云はく、「案内を検しむるに、一国を討ちたりといへども、公の責め軽からじ。同じくは坂東を虜掠して、暫く気色を聞かむ」てへり。将門報答して云はく、「将門が忿ふところも皆これのみ。その由何となれば…苟くも将門、剝帝の苗裔、三世の末葉なり。同じくは八国より始めて、兼ねて王城を虜領せむと欲ふ。……」といへり。

また数千の兵を帯いて、天慶二年十二月十一日をもて、先ず下野国に渡る。……将門を名けて新皇と曰ふ。
(天慶二年(939年)11月21日に(将門は)常陸国に兵を進めた。常陸国司側はずでに警固を整えて将門の軍を待ち受けていた。……合戦の結果、常陸国の軍勢3000人が討ち取られた。

この時、武蔵権守の興世王はひそかに将門に誘いをかけて言った。「過去の例からみると、わずか一国を討つたに過ぎなくとも、朝廷からの処罰は軽くはない。どうせ同じことなら関東全体を奪い取って、しばらく様子をうかがったらどうだ。」将門も答えていう。「将門が思うところも同じだ。何となれば、……苟くも自分は剝帝の苗裔(桓武天皇の末裔)で三世の末葉(高望王三世の子孫)である。同じことなら関東八国から始めて、都まで征服したいと思う。」という。

さらに数千の兵を従えて、天慶二年(939年)12月11日にまず下野国に侵入した。…将門を名付けて新皇という。)

上記のように、平将門の乱についての経緯などは、院政期に成立した軍記物語『将門記』に記されているんだけど、この史料に関する難しい箇所をいくつか説明しておこう。

まず、空欄になる元号は「承平」ではなく、「天慶」であること。そもそも、承平(931~938)・天慶(938~947)年間に起こった平将門の乱と藤原純友の乱を総称して承平・天慶の乱と呼んでいるけど、本当はこれおかしいんだよね。なぜなら、平将門が平国香を殺害した935年は、「承平」年間にあたるんだけど、この時点ではあくまでも自分の所領を奪い返したただけだから、反乱にはあたらない。将門が反乱を起こしたのは、939年に常陸国府を襲撃した頃からで、その頃の元号は「天慶」になる。ゆえに、平将門の乱・藤原純友の乱を総称した「承平・天慶の乱」は、本来は「天慶の乱」という方が妥当であると思う。入試で記述する場合は「承平・天慶の乱」と書くべきだけど、このことを知っていると、平将門の乱の史料では、「天慶」の元号しか出てこないことにも合点がいくからね。



また、史料だけではなく、襲撃した国府の順番も問われてくる。そもそも、平将門は下総国(千葉県北部)を拠点としていた。そこから、進軍するとしたら、右の地図のように常陸国(茨城県)→下野国(栃木県)→上野国(群馬県)となるはずだよ。ゆえに、史料では反乱を起こした最初の国である「常陸国」が、その後軍を進めた「下野国」が空欄として問われるわけだ。

さて、平将門が関東で暴れているのと同じ頃、四国でも大暴れしている者がいた。それが、藤原純友の乱。藤原純友は、もともと伊予掾の立場であり、伊予国(現在の愛媛県)の白振島を拠点にしていた。伊予「掾」とは、律令制度の四等官制でも学習した守・介・掾・目の3番目「掾」のことなので、伊予国司のNo.3ということになる。つまりは、藤原純友はもともと伊予国司という朝廷に仕える立場であったのだけど、その彼がなぜ反乱を起こしてしまったのだろうか？



彼は伊予国司として、もともと瀬戸内海の内海海賊を取り締まる立場にあった(瀬戸内海は米がそれほど取れないため、生活が厳しく海賊などの略奪行為をする者が多かった)。そして、その海賊を取り締まっていたんだけど、ある日、取り締まった片腕のない赤髪の内海海賊に出会いこう言われる。

純友「おい、海賊！何でてめえ海賊なんて略奪行為をしているんだ！」

赤髪「ふっ…、何で海賊をしているかだっ？その理由が知りたいか？」

純友「…な、何か深い理由があるというのか？」

赤髪「…深い理由なんて何もない。ただ、海賊は楽しいぞ。ルフィ…」

…というわけで、純友は海賊になってしまったんだけど、これには朝廷もビックリだ。まさか、海賊を取り締まる立場の人間が海賊になってしまうなんて。そこで、朝廷は使節を派遣して提案を出してみた。

朝廷「純友、オマエの海賊行為に関しては不問としてやる。これからは、お前たち海賊の生活は保障するから、もう一度国司に戻れ。」

純友「朝廷に仕える海賊…、いわゆる王下七武海のクロコダイル的な感じか、良いだろう。」

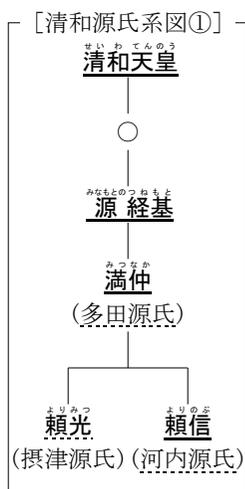
こうして、純友は国司に戻ったわけだけど、あのスモーカー大佐はこう言っている。「いいか、タシギ。海賊はどこまでいっても海賊なんだ。」(ここまでのワンピースネタがわからない者は ggrks。…いや、ググってみるとよい)…そう、結局純友はまたもとの海賊に戻って、平将門が関東で暴れていた同時期に、瀬戸内海の内海海賊を率いて大宰府などを襲撃して反乱を起こしてしまったんだ。でも、その途中で家臣の裏切りなどもあって、清和源氏の祖である源経基と追捕使(押領使と並ぶ犯罪者追捕のための職)小野好古によって鎮圧されちゃいましたとき。

[C] 源氏の台頭—テキスト P21 対応—

こうして、平将門の乱と藤原純友の乱を総称した承平・天慶の乱が片付いたわけだけど、ここで勢力を伸ばすきっかけを得たのが藤原純友の乱を鎮圧した源経基だ。彼は、清和天皇の孫であるので、ここから始まる家柄を清和源氏という。そして、その経基の子である源満仲も、摂関政治期の969年に起きた安和の変で登場した人物だったよね。

安和の変といえば、藤原氏にとって将来的なライバルとなりえる、左大臣であった醍醐天皇皇子の源高明を失脚させるために、仕組まれた事件。この時に、藤原氏に協力して、源高明に謀叛の疑いがあると密告した人物こそが源満仲だ(源満仲は摂津国の多田という場所に土着したので、多田源氏とも呼ばれる)。

こうして、藤原氏と結びつききっかけを得て、その子の源頼信・頼光兄弟も藤原氏(摂関家)と結びついて勢力を伸ばしていくことになるんだ(源頼信は河内国に土着したため河内源氏、頼光は摂津国に土着したため摂津源氏とも呼ばれる)。



さて、ここで注目しておかなければいけない点がある。源満仲は摂津国の多田、頼信は河内国、頼光は摂津国と、もともと源氏が拠点にしていたのは畿内であるということだ。一方で、平将門の乱にも代表されるように平氏はもともと東国を基盤にしていた。その立場が最終的には、源氏の基盤は東国、平氏の基盤は西国になるんだけど、その契機となったのが1028年～1031年に起きた平忠常の乱なんだ。

<平忠常の乱(1028～1031)>

平将門が関東で暴れた後、関東各地では桓武平氏の一族が勢力をふるっていた。その中でも、上総(現在の千葉県北部)・上総(現在の千葉県中部)に大勢力を築きあげたのが、前上総介(もと上総の国司 No. 2)であった平忠常だったんだ。でも、こいつは国司の命令に従わずに税を納めないわ、挙句の果てには、1028年に安房国(現在の千葉県南部)の国司を焼き殺すわで、手のつけられない傍若無人ぶりだった。

そこで、朝廷は平忠常追討のために源頼信を関東に派遣することにした。そうしたら、忠常は戦わずに「頼信様には敵わない」って1031年に降伏しちゃったんだとさ。この忠常が戦わずに降伏した理由については諸説あって、もともと忠常が源頼信の家人(家来)だったというものや、3年間に暴れていたため、源頼信がやってきた頃には疲弊しちゃっていたという説がある。

この平忠常の乱を鎮圧したことで、源頼信は関東の武士たちと主従関係を結んでいく。こうして、平忠常の乱を契機に源氏が東国へ進出していくことになるんだ。

そして、その東国における源氏の勢力を拡大すること契機になったのが、東北地方で1051年から起きた前九年の役と、1083年から起きた後三年の役だ。

まず、前九年の役とは、陸奥国の俘囚のリーダーであった安倍頼時・貞任父子が1051年から1062年まで起こした反乱。俘囚といえば、服属した蝦夷のことを指すけど、もともと蝦夷であったこともあって安倍頼時は、朝廷の命令に従わずに税を納めなかったりしたんだ。そこで、朝廷は源頼信の子である源頼義を陸奥守・鎮守府将軍に任命して、鎮圧のために派遣したんだ。

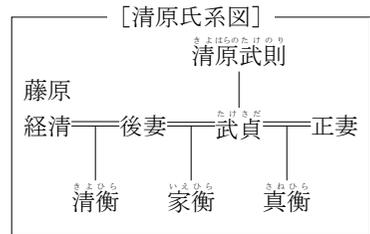
源頼義は子の**義家**とともに東北地方に赴くことになった(源頼義は石清水八幡宮を勧請して、鎌倉に源氏の守り神として**鶴岡八幡宮**を建立し、そこで元服した義家は**八幡太郎**と呼ばれた)。…だけど、これが結構長引いちゃってね〜。お隣の**出羽国**の俘囚のリーダーであった**清原氏**に応援を依頼したことで、ようやく鎮圧することに成功したんだ。なお、この前九年の役に関する経緯は、院政期に成立した『**陸奥話記**』に記されている。

[清和源氏系図②]



さて、この前九年の役によって清原氏が奥州の覇者となったわけだけど、その後、**清原氏**の内部で家督相続をめぐる争いが起きてしまった。それが **1083年**から1087年まで起きた**後三年の役**と呼ばれるものだ。

先ほどの前九年の役の際に源頼義・義家父子を援助してくれたのが清原武貞・武貞という父子なんだけど、その武貞には子供が3人いた。正妻との間に生まれた嫡子の**真衡**、さらに後妻との間に生まれた**家衡**、そして後妻の連れ子で養子とした**清衡**。



…何か、超めんどくさい兄弟関係なんですけど…。ということは、親父の武貞が死んだ後には相続争いが起こるはずだね。そして、武貞の死後、嫡子の真衡が継ぐことに不満な家衡・清衡が、真衡を攻撃したんだ。

ここに、「ちょっと待った〜！ どう考えても真衡殿が正統でしょ！」って介入したのが、**陸奥守・鎮守府将軍**であった**源義家**(父の頼義は既に亡くなっている)。義家が介入したら、この戦いの決着は着いたようなもの。家衡・清衡は散り散りになって逃げていったんだ。

源 義家「見てくだされ、真衡殿！ 敵が散り散りになって逃げていきますぞ、わはは。」

清原真衡「……………」

源 義家「なあ、真衡殿？」

清原真衡「……………」

源 義家「…真衡殿？」

清原真衡「……………」

源 義家「…し、死んどる!!!」

…と、戦いの途中で真衡が死んでしまったんだ。その後、義家の裁定で、家衡と清衡はそれぞれ半分ずつ所領を相続したんだけど、家衡はそれでも不満。今度は清衡の屋敷を襲撃して、妻子供みんな殺してしまった。

清原清衡「義家殿…。家衡に屋敷を攻められて、私は命からがら逃げられたんだが、妻子供も全て殺されてしまった…。助けてくだされ…。」

源 義家「家衡め、何ちゆう卑怯なやっちゃ！ わかった、助けちゃる！」

こうして、清原家衡は滅ぼされ、源義家に援助してもらった清原清衡が清原氏を継ぐことになったんだ。なお、この合戦の様子は、南北朝時代に成立した『**後三年合戦絵巻**』に描かれている。

<前九年の役(1051)・後三年の役(1083)の覚え方>

「1060年から前九(マイナス9)=1051年)・1080年から後三(プラス3)=1083年」

その後、清衡は実父の藤原経清の姓に戻したため、**藤原清衡**と名乗ったんだけど、この藤原清衡は、藤原道長・頼通などとは全く血が繋がっていない(この時代、中央では「藤原」さんだらけでキリがなかった。そこで、それらを区別するために伊勢守の藤原さんなら「伊藤」さん、加賀守の藤原さんなら「加藤」さん、佐渡守の藤原さんなら「佐藤」さん、などの苗字が誕生した)。ゆえに、この清衡を祖とする家柄は、中央の藤原氏とは別物ということで、**奥州藤原氏**と呼ばれるんだ。

<奥州藤原氏>

後三年の役で最終的な勝者となった藤原清衡を祖として、鎌倉時代初期まで奥州の覇者として君臨したのが奥州藤原氏だ。その奥州藤原氏は、2011年に世界遺産にも登録された岩手県平泉を拠点として、政庁(政治を行う役所)は柳の御所と呼ばれたんだけど、その繁栄っぷりはハンパなかった。もともと、奥州(特に陸奥国)は金の産地として、さらに名馬の産地としても知られている。そうした莫大な金を背景に、藤原清衡が建立したのが金箔で塗り重ねられた中尊寺金色堂だ。



[中尊寺金色堂]

この清衡と同じように、子の基衡は毛越寺(毛越寺にある庭園は極楽浄土を表現したものとして有名で、東北に旅行などに行く場合にはぜひ見に行ってみてほしい)、孫の秀衡は無量光院と寺院を建立しているんだけど、その秀衡が治めている頃に身を寄せていたのが、あの源義経だ。

ここで、鎌倉時代と関連するお話をちょこっとしておこう。義経は幼少の頃、秀衡のお世話になっていたけど、のちに兄の頼朝が挙兵したことを聞くと鎌倉に駆けつけることにした。そして、最終的に平氏を滅ぼす大活躍をするわけだけど、のちにはお兄ちゃんと対立することになってしまう。そこで、自分が幼少の頃お世話になっていた秀衡を頼ることにした。秀衡も義経をかくまってあげて、頼朝から何度も義経を差し出せと言われても、それを突っぱねる(…カッコいい)。

ところが、そんな秀衡が亡くなってしまふ。子の泰衡は、はじめは父の遺言にそって義経をかくまっていたんだけど、最終的に頼朝からの要求にビビって、義経を攻め殺した。でも、頼朝君は今まで義経をかくまっていたという理由で、許してくれなかった。こうして、1189年に奥州征伐が行われ、奥州藤原氏は4代目の泰衡の代に滅亡してしまったんだ。

<奥州藤原氏の覚え方>

「肝(き も) 冷 やす, チュー も 無料!？」

清衡 基衡 秀衡 泰衡 中尊寺 毛越寺 无量光院



さて、話を源義家に戻そう。後三年の役を平定し終わった義家は、朝廷に赴いてその報告をする。

源義家「このたび、後三年の役を平定してまいりました。」

朝廷「うむ。ご苦労であった。」

源義家「…え?…あ、あの、それだけでございますか？」

朝廷「…何か？」

源義家「この戦で家臣たちも頑張りましたので、朝廷から褒美をいただけないでしょうか？」

朝廷「そんなものは知らん。そもそも、前九年の役とは違って、後三年の役はオマエが勝手に介入しただけだろ? 朝廷はそんな命令出しておらんから、褒美なんぞやらん。」

源義家「そ、そんな…。」

そんな義家君が戻ってきて、そのことを家臣たちに告げる。

源義家「すまない。朝廷から褒美はいただけなかった。」

家臣「そ、そんな～。…でも、しょうがないか。」

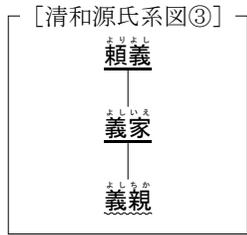
源義家「しかし、安心せよ。私から私的に褒美を与える。」

…ちよっ! 義家さんカッコ良すぎでしょ! もう家臣たちの喜びもハンパない。家臣たちからすれば、こんな義家さんにだったら抱かれてもいいぐらいの気持ちだ。そして、こんな方に自分の所領を守ってもらえれば安心するよね。そのため、義家に土地を寄進する者が相次いでいったんだ。

これに、朝廷は危機感を覚える。「ちょっと、義家の名声が高まりすぎだ。このままだと、いずれは朝廷をも凌駕する勢力になりかねない。」と考へて、源義家に対する荘園の寄進を禁止してしまつたんだ。

こうした朝廷の圧力に対して、義家はひたすら我慢する。ここで朝廷に逆らってしまったら、源氏は滅ぼされかねないからね。でも、これに我慢できなかったのが、子の源義親だ。そして、配流先の隠岐から出雲に脱出した義親が起こしてしまつたのが 1107年の源義親の乱なんだ。

これを鎮圧したのは、ずいぶん久々の登場になる平氏の平正盛。平将門の乱を鎮圧した人物として平貞盛がいたけど、その子である惟衡の子孫は伊勢国を拠点にしていたんだ。その伊勢国を拠点にしていたことから、平正盛・忠盛(子)・清盛(孫)などを伊勢平氏と呼ぶ。



さて、ここまで清和源氏について説明してきたけど、人物が多すぎて覚えられないだろう。いったん系図を整理すると、以下ようになる。



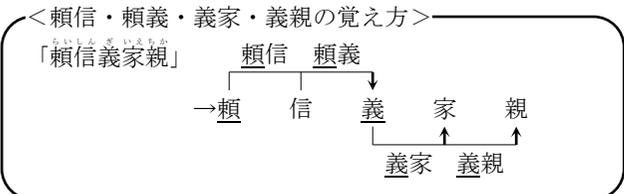
でも、こんな覚えられるわけないから、語呂で覚えてしまえばいい。この語呂は僕の生徒にしか意味がわからない語呂だけだね。

<清和天皇・源経基・満仲の覚え方>

「say what's 根本マン」

→セイ ワ(清和天皇)ツ ねもと(経基)マン(満仲)

じゃあ、頼信から義親まではどう覚えればいいのか(為義・義朝・為朝は保元の乱・平治の乱で登場するので、また別の語呂がある)。



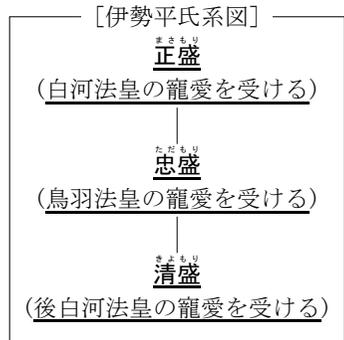
この時代、大蛇を倒した伝説をもつ「頼信義家親」という武将がいたのを知っているかな？以前、授業内で生徒に尋ねたら、一人の日本史が得意な生徒が「聞いたことあるかも…」と答えた。

…んなわけねえよ！だって、「頼信義家親」って俺が勝手に作った人物だもん。こんな人物存在しません。ただ、こんな人物がいたということにしておけば、文字を組み合わせると頼信・頼義・義家・義親を覚えることができるよね。

[D] 平氏の台頭—テキスト P21 対応—

1107年に起きた源義親の乱を鎮圧したのは伊勢平氏の平正盛だった。そして、正盛は自分の所領を白河法皇に寄進して、北面の武士に任命されるなど白河法皇の寵愛を受けていくんだ。ちょうど、この時期には藤原氏による摂関政治が終わって、院(上皇・法皇)による院政が展開されていたからね。

つまり、藤原氏が摂関政治を展開していた頃に、藤原氏(摂関家)と結びついて勢力を伸ばしたのが源氏。その後、院(上皇・法皇)が院政を展開し始めると、院(上皇・法皇)と結びついて勢力を伸ばしたのが平氏ということになるんだ。



そして、正盛の子の忠盛は、白河法皇に続いて院政を展開した鳥羽法皇に所領を寄進して、鳥羽法皇の寵愛を受けていく。ただ、親父の正盛は源義親の乱を鎮圧した、子の清盛は保元の乱・平治の乱で勝利したなどのキーワードがあるんだけど、忠盛にはこれとった大きな兵乱に勝利したとかキーワードがあまりない。そのため、「瀬戸内海の家賊を平定して鳥羽法皇の信任を得た」という内容がキーワードになるんだ。

さらに、忠盛の子の清盛は保元の乱や平治の乱に勝利して、白河法皇に続いて院政を展開した後白河法皇の寵愛を受けるんだけど、これらに関する細かい内容は[院政]で説明していこう。

<伊勢平氏の覚え方>

「マサチューセツ」

→マサ(正盛) チュー(忠盛) セツ(清盛)ツ